

18 世紀ロシアの南東植民政策とオレンブルクの建設 — I.K.キリーロフのいわゆる「草案」について—

豊川 浩一

(明治大学文学部)

1. はじめに

1-1. 「草案」提出前夜のロシアと南東地方

かつて筆者は、オレンブルク市の成立とオレンブルク・カザークの発生を論じた論稿のなかで、元老院秘書官長(ober-sekretar')であった I.K.キリーロフ(1695-1737)が、南東地域におけるロシアの抱える諸問題をめぐって、自らの見解(ここでは、次節で示す正式な表題から「草案」(Proekt)^{*1}と略す)を政府に示したことを述べた。それは、ロシア南東地域の豊かな天然資源の有効利用と経済開発、カザーフ人とバシキール人の境界地域における要塞の造営、およびオリ川河口における要塞都市(gorod-krepost')の建設を内容とするものであった。この点については、カザフスタンの小オルダのハーン、アブルハイル(1693-1748。彼は小オルダを率いてロシアに臣従することを願い出て、1731年、それが受け入れられた)も同様の請願をしていた。彼によると、新たに建設される都市を経由したロシアによる広範囲な交易が、単にカザフスタンとの間だけではなく、中央アジアやはるか遠くインドとの間でも行われ得ると考えたのである^{*2}。しかし、ここで重要なのは、「草案」で展開された考えがその後の帝政ロシアにおけるウラル・沿ヴォルガ地域に対する植民・民族政策の基本線をなし

*1 従来、筆者はこれを「見解」という訳語を充てていたが(拙稿「18世紀ロシアの地方社会—プガチョーフ叛乱前夜におけるオレンブルクとオレンブルク・カザーク」、山本俊朗編『スラヴ世界とその周辺』所収、ナウカ、1992年、55頁など)、ここではそれを改め「草案」とする。なお、「草案」の中で表記されている「キルギス・カイサク」ないし「キルギス」とは、18世紀においては「カザーフ」を指していた。また、本文中の「カラカルパク」、「カラ・カルパク」といった一貫していない表記は、I.K.キリーロフの表記そのままを日本語に転記したものである。さらに、マル括弧は「草案」の著者キリーロフによる註であり、角括弧は本論文の筆者(豊川)による補註である。

*2 *Istoriia Kazakhskoi SSR, S drevneishikh vremen do nashikh dnei*, tom 3 (Alma-Ata, 1979), p.45; B. Nolde, *La Formation de l'empire Russe*, t.1 (Paris, 1952), p.219; R.P. Bartlett, *Human Capital, The Settlement of Foreigners in Russia 1762-1804* (Cambridge, 1979), pp.6-7. カザーフ史の側からすると、オレンブルク建設の考えはむしろ本文で後述する A.I.テフケリョーフによってアブルハイル・ハーンに提案されたものであるという(*Istoriia Kazakhskoi SSR*, p.46)。

たという点である。また 18 世紀のいわば「啓蒙の時代」のなかで、アメリカ大陸でのスペインやポルトガルの活動、インド・中国さらには日本という遙かなる国や地域との交易をも視野に入れて述べられたということも興味深いのである。

18 世紀初頭の重商主義的な考え方も手伝って、ピョートル一世は積極的な対外政策を推し進めることになった。ロシアにとって、西方ではバルト海沿岸に強固な足場を築くことが主要な課題だとするならば、東方における課題は中国、インド、イランそしてカザーフの諸オルダや中央アジア諸地域と経済的に幅広くかつ緊密な関係を樹立することであった^{*3}。そのため、ピョートルはウルゲンチ付近のヴァシーリ・カラの金鉱を占領し、アム・ダリアに通ずる幾つかの要塞建設を計画していた。それは、中央アジアやインドとの貿易を安全かつ迅速に行うためのものでもあった。こうしたロシアの政策は、1716 年、A.ベコヴィチ＝チェルカスキー公のアム・ダリア遠征によって実行に移された。しかし、翌 17 年、この遠征隊はヒヴァにおいて殲滅の悲劇に見舞われた。こうして、政府の計画は頓挫したかに見えたが、実際には、ピョートルはさらにヒヴァやブハラなどの諸ハーン国に対し、ロシアへの服属を促した^{*4}。また、同年、政府は陸軍中尉コジンに命じて、カスピ海を視察し中央アジアよりインドに達する水路があるかどうかを調査させているのである^{*5}。

1-2. キリーロフと「草案」の概要

本稿の目的は、18 世紀以降、ロシアの南東地域における基本的政策となった I.K. キリーロフの「草案」の内容を具体的に紹介し、検討することにある。この「草案」そのものは、1900 年に A.I. ドブロスマイスロフが編集した『ロシア史に関する史料：オレンブルク地方の行政と制度に関する法令と他の史料の集成。1734 年』（第 1 巻）に収録されている（正式の表題は「キルギス人[カザーフ人]をロシア臣民にし、また彼らを支配する方法に関する元老院秘書官長イヴァン・キリーロフの草案」
[Proekt ober- sekretaria Ivana Kirillova ob uderzhanii v russkom poddanstve kirgizm i

*3 *Polnoe sobranie zakonov (PSZ)*, T.IX, No.No.6571, 6576, 6584.

*4 *Ocherki istorii SSSR. Period feodalizma*, 1 chetvert' XVIII v. (Moscow, 1954), pp.601-602; V. Illeritskii, "Ekspeditsiia kniazia Cherkasskogo v Khivu," *Istoricheskii zhurnal* 7 (1940), p.46. ピョートル大帝の意図した政策については、本論文で利用した史料（註（6）に掲げた）に散見する。

*5 シチェグロフ『シベリア年代記』、原書房、1975年（復刻版）、223 頁。

sposobakh upravleniia imi]^{*6)}。この「草案」については、1970年代に18世紀バシキール叛乱史の専門家 I.G.アクマーノフが紹介論文を書いており^{*7)}、本稿ではそれを参考にしながら、史料の紹介とともに、キリーロフ（そして政府部内）のロシア南東地方に対する植民・民族政策を検討するものである。

キリーロフがアンナ女帝に提出した「草案」は、ただちに政府によって承認され、続いて要塞都市オレンブルクの建設が推進されることになる。しかしより重要なのは、「草案」で主張された通り、この都市がロシア政府による南東地方の植民・民族政策を展開する上で拠点となっただけでなく、キリーロフの考えがその後の政府による政策遂行上の指針となった点にある。本稿では、こうしたことをも念頭に置きながら検討しようとするものである。

なお、この「草案」を起草した元老院秘書官長 I.K.キリーロフについては、彼が庶民の出身であること以外、1712年までの活動について何も知られていない^{*8)}。12年以降、ピョートルの制定した官等表に従って一番下の地位から勤務を開始して元老院秘書官長の官位にまで達し、最終的には5等官 (sovetskii-sovetnik) にまで登り詰めた。オレンブルクに居住し、同地方の広範な民族学的・歴史的研究を行ったロシア最初の準アカデミー会員 P.I.ルィチコフによると、キリーロフは「大変勤勉な人で、学問の愛好者であった。数学・力学・歴史・経済・冶金学に関してそうであった」^{*9)}という。1727年に書かれ、37年に手直しされたキリーロフの『全ロシア国家の隆盛情況』もまたロシア帝国支配について、当時の官僚にして知識人としての彼の考え方を知る最良の本として重要である^{*10)}。

この時期、キリーロフの関心は南東地方のロシアの支配すなわちロシアの政治発展の可能性を探ることに向けられていた。彼自身の言葉によると、彼は同地方の植民政策を厳格に推し進めるこのになる A.I.テフケリョーフ（彼はマメトの豪族 murza の出

*6 A.N. Dobrosmyslov, comp., *Matrialy po istorii Rossii, Sbornik ukazov i drugikh dokumentov, kasaiushchikhsia upravleniia i ustroistva Orenburgskogo kraia. 1734 god. Po arkhivnym dokumentam turgaiskogo oblastnogo upravleniia*, T.1 (Orenburg, 1900), pp.1-50 (以下、*Matrialy* と略す)。なおドブロスミスロフが史料を編纂する際に集めたトルガイ地方役所のアルヒーフはオレンブルク地方全体とりわけキルギス・ステップ (カザーフ・ステップ) の社会構造と行政に関する甚だ重要で価値のある史料を含んでいる。P.I.ルィチコフ、A.リョーフシン、V.N.ヴィテフスキーなどもこのアルヒーフを利用している (*Matrialy*, "Predislovie")。

*7 I.G. Akmanov, "Iz istorii Orenburgskoi ekspeditsii (Kharakteristika "Proekta" I.K.Kirilova)," *Uchen. zap. Bashkir. un-ta* 70 (1972), Seriya ist. nauk, No.14, pp.90-106.

*8 M.N. Novlianskaia, *Ivan Kirilovich Kirilov* (Moscow-Leningrad, 1964), pp.7-9.

*9 P.I. Rychkov, *Istoriia Orenburgskaia, 1730-1750* (Orenburg, 1896), p.29.

*10 I.K. Kirilov, *Tsvetushchee sostoianie vserossiiskogo gosudarstva* (Moscow, 1977).

身で、ロシア帝国外務参議会の通訳官および外交官として活躍する)とともに、アブルハイル・ハーンの支配領域近くにロシアの要塞を建設することについて、彼と「会談を持った」^{*11}。この使節の成功が知られてから、キリーロフはロシアの南東地域に向けて遠征隊を組織する計画を政府に提出した。それは実際に、1734年のオレンブルク遠征隊の形成となって具体化し、彼自身がその長に任じられた(1734年5月1日)のである。

P.I.ルィチコフは、この時期、キリーロフが政府帝室官房(kabinet)に二つの「草案」(projekt)を提出したと伝えている^{*12}。第一の「草案」は「1733年の覚書」(Zapiska 1733 g.)という表題が付され、第2回カムチャトカ遠征後の1733年後半に書かれたものと思われる。第二のそれは「キルギス・カイサク[すなわちカザーフ]人およびカラ・カルパク人の諸オルダに関する、臣下による提案および説明」(Nizhaishee predstavlenie i iz"iasnenie o kirgis-kaisatskikh i kara-kalpatskikh orda)であり、それは1734年初めに書かれた^{*13}。

基本的に二つの提案は内容面でお互いに非常に類似している。他方、その相違は次の点にあるといえる。まず第一に、「1733年の覚書」の最初の部分では、ベーリングの行った第2回カムチャトカ遠征について言及し、またその関心の中心は、カザフスタン、中央アジアおよびバシキーリアにおけるロシアの担うべき課題について向けられている。さらに、第2回カムチャトカ遠征も話題になっている。他方、「臣下による提案および説明」では、論点が完全にカザフスタン、中央アジアおよびバシキーリアにおけるツァリーズム支配の計画に充てられている。第二に、「1733年の覚書」は、大量の具体的な資料を含んでいるのに対し、他方、「臣下による提案および説明」では、そうしたことが分量の上でかなり少なくなっている。またそれは構成の点からも第一

*11 *Materialy*, p.18. なお、小オルダのロシアへの帰属は当初きわめて緩やかなものであったが、そのなかでアブルハイル・ハーンとA.I.テフケリョーフの果たした役割は大きかった。すなわち、1730年9月8日、アブルハイルは、ウファーでアンナ女帝に対し、ロシアへのカザフスタンの帰属を願い出ている。これに対し、翌年2月19日、アンナ女帝はアブルハイル・ハーンおよび「全カザーフ人」に対し、彼らの帰順を認める勅令に署名した。カザーフ人に小オルダのロシアへの帰順を知らせるため、またその誓約を彼らから受けるために、A.I.テフケリョーフを長とする特別使節がカザーフのステップに向かったのである(*Istoriia Kazakhskoi SSR*, p.37)。また次も参照されたい。B.A. Tulebaev, "Dobrovol'noe prisoedinenie Kazakhstana k Rossii i ego progressivnoe znachenie," *Naveki vmeste. K 250-letiiu dobrovol'nogo prisoedineniia Kazakhstana k Rossii* (Moscow, 1982), p.60.

*12 Rychkov, *Istoriia Orenburgskaia...*, p.8.

*13 Novlianskaia, *Ivan Kirilovich Kirilov...*, pp.94-96; L.E. Iofa, *Sovremenniki Lomonosova I.K.Kirilov i V.N.Tatishchev* (Moscow, 1949), pp.19, 26. その「臣下による提案および説明」は、*PSZ, IX, No.6571* に収められている。

の論文より仕上り具合が上であり、またキリーロフがそこで巧みに駆け引きを行っているのが目を惹くのである^{*14}。

しかし、本質的には、両者の「草案」はお互いに不可分で一体のものであった。両者はあたかもお互いに補完しあっているかのようなものである^{*15}。

2. 「草案」の基本的目的

それでは、キリーロフの提出した「草案」の根本的な目的は何か。彼はその点を端的に次のように述べている。

「わが女帝陛下[アンナ女帝一筆者]の現在の恵まれた専制体制のもとで、神のご慈悲と裁きにより、また女帝陛下の幸運によって、偉大で不朽の二つの事業は、それが栄光であるのみならず、帝国の拡大および計り知れない富への扉を開くものである。すなわち、第一の事業はシベリア遠征とカムチャトカ遠征である。第二のものは未だ扉を開けていないが、キルギス・カイサク [カザーフ] とカラカルパクに関してである。そして、神のご加護を懇願して、それらが成就したなら、ロシアの版図は一層拡大し、そこからの収入が臣民の負担の軽減をもたらすのである」^{*16}。

これらの言葉のなかに、キリーロフの「草案」に関する全般的な方向性を伺うことができる。つまりは領土の拡大であり、新たな富の獲得であった。では、ロシアは果してどのような領土をもたなければならないのか、と彼はさらに問かけている。特に、カザーフについては次のように論じているのである。

「現在、第一の原則に対して、[われわれは]キルギス・カイサク [カザーフ] のアブルハイル・ハーンのもとでかつて使節を務めたテフケリョーフを通して得た最初の魅力的な情報を入手した。それは、自分の臣下とともにこのハーンが、すべての民衆を引き連れて、いま一人のカラカルパクのハーンともどもロシアに帰順するというものであり、そのことについてはすでに記されていた。かくしてここに、まさにアラル海までの道が開かれたのである」^{*17}。

*14 *Materialy*, pp.1-49.

*15 Akmanov, "Iz istorii...", p.92.

*16 *Materialy*, p.1.

*17 *Ibid.*, p.18.

このように、キリーロフは南東ロシアの拡大の手始めとしてカラカルパクをロシア帝国へ帰順させることを考えていた。この点について、彼はこの「草案」のなかで何度もそのことを繰り返し述べている^{*18}。さらに彼は、カザーフの大オルダをロシア帝国に帰順させることも考えていた。その際、この支配のあり方は、当時のロシアの中央アジアに対する対応を示すものとして注目すべきである。

「大キルギス・カイサク・オルダ[カザーフの大オルダ]、それは現在、女帝陛下のもとに、臣民として受け入れて頂くべく願ひ出ているが、そのことを拒むべきではない。さらにそれだけではなく、あらゆる方法によって順撫すべきなのである」^{*19}。

また、彼は中オルダもまもなくロシアに臣従するものとみなしていた^{*20}。かくして、これらのことから、キリーロフはロシア政府に対し、帝国による全カザフスタンおよびカラカルパク人の土地の併合を進言することになる。彼の意見によると、まず、アラル・ハーン国を併合し、後に同国がロシア帝国に臣従するように仕向けなければならないというものであった^{*21}。

3. 中央アジアへの動き

3-1. 版図拡大の動機

カザーフスタンや中央アジアについて、キリーロフはそこでは商業が盛んであることを次のように強調しながら、同地方の魅力およびその地域との交易によりロシアが受ける利益について注意を喚起している。

「ブハラの子孫たちが住んでいる首都ブハラには、当地の商人や、ペルシア、インド、アルメニア、アストラハン、バルハおよびその他の地から商人たちがやって来て、商品やブハラの金を求めて豊富な商いがバーター取引によって行われている。またここは有色のルビーやエメラルドが相当量ある。その地からロシアへは主要な商品としてブハラ産の羊の毛皮が運ばれているが、それらをこのウズベク人たちがもたらしたのである」^{*22}。

*18 Ibid., pp.26, 29, and passim.

*19 Ibid., p.42.

*20 Ibid., pp.34-35.

*21 Ibid., pp.11-12.

*22 Ibid., p.13.

なかでも、パミール山中のヴォドクシャン地方は重要であった。そこでは、「都市住民は多くの富を保有し、上記の宝石や金を商売している」^{*23}。また、都市バルフも繁栄し、豊かな商業都市となっていた^{*24}。

続いてキリーロフが問題にするのは、カスピ海の東から伸びる広大なステップ地方に住むトルクメン人、および中央アジアのヒヴァ・ハーン国とブハラ・ハーン国についてである。キリーロフは再三再四、これらの土地の併合の必要性を説いている。すなわち、彼は、「女帝陛下[アンナ女帝]に対し、各地に分散しているブハラの領土が次々と帰順する」ように勧めることが必要であると訴えている^{*25}。そこで、彼は中央アジアの征服のために遠征を行うことさえ考え、次のように述べる。

「こうした都市の基礎を置くこと、キルギス・カイサクやカラ・カルパクの民衆をしっかりと順撫すること、バシキール人のタルハンやメシチェリヤーク人[現称ミシャーリ人]を秩序立たせ鼓舞すること、の3点ができる、彼らと共に行動することが当てにできるようになる。また何よりもアブルハイル・ハーンをヒヴァ人に対して立ち上がらせることができるであろう。それは、彼[アブルハイル・ハーン]が自分の部下を使って、彼ら[ヒヴァ人]に対して身代金を支払い、捕虜を解放するためである。彼[アブルハイル・ハーン]は、彼ら[ヒヴァ人]に対し、わが[ロシアの]軍勢の手助けが無くとも強力であり、彼ら[ヒヴァ人]に対して敵意を抱いているのである」^{*26}。

さらに、彼は次のようにも指摘する。

「今年の夏、ブハラ、バルフおよびヴォドクシャンへ行った前大尉ドゥブローヴィンが私に語ったように、シベリアにおけるコンタイシャ[カルムイク人指導者]の領土を通過して帰還したとき、彼によってヴォドクシャンまでの通行について、実際には行ってはいないが、確信を得ることができたのである。また、上述の密偵のもたらした情報により、当のアブルハイル・ハーンをブハラに、その後そこから、かのヴォドクシャンへ向けさせるべきであろう。そこにはバシキール人たちが5000名にまで膨れ上がり、カザークも1000名、さらに1連隊の兵士がいる。馬や駱駝も伴っている。...ブハラやそこからヴォドクシャンまでも...女帝陛

*23 Ibid., p.15.

*24 Ibid., p.16.

*25 Ibid., p.41.

*26 Ibid., pp.26-27.

下の幸福がそこにまで至るときには、ブハラとヴォドクシャンに拠点を置かねばならず、特別な人々の一隊により行く手を阻む余計なものを取り除かなければならない。さもなくば、そこですべての捕虜たちがわれわれにまわりつくことになるからである」^{*27}。

それにしてもキリーロフはカザフスタンや中央アジアのどのような点に惹きつけられたのであろうか。端的にいえば、それは何よりも同地方の計り知れない程の富、すなわち金や貴金属である。すでにそのことはピョートルの時代から知られていた。具体的に、キリーロフはこの地域を次のように特徴付けている。彼の得た情報によれば、この地方は先の鉱物の豊かな産地・鉱床 (mestorozhdenie) をもっているという。前述したように、ブハラにはルビー、エメラルドの鉱石が豊富である。同地からロシアへの主要な商品はブハラ産の羊の毛皮であり、それをウズベク人たちは大量に持ってくる。さらには、「ホジャン・ハーン国とホジャンの都市は...サマルカンドおよび他の都市と隣り合っている。...ホジャン川の源流では金が採れる」。アラル・ハーン国にもまた金の鉱石があり、また「雲母の山」がある。コンドゥス地方の「コンドゥス川沿いでは...金が採取される」^{*28} という。しかし、最も豊かなのはヴォドクシャンの地で、そこには「レジェヴェルトと呼ばれるラピス・ラズーリ、ルビー鉱石、緑の大理石が豊富に採掘される山々がある。山々でも、また二つの川でも金が大量に採取された。以前[ブハラの支配下にあった時には]、それらはブハラに運ばれた。資源 (bogatstvo) の上で第一に重要なのがこうした山々であった」^{*29}。かくして、「ブハラによる支配の時代に、宝石を除いて金だけで 500 プード[約 8.2 トン]かそれ以上...ブハラ・ハーンに届けられたのである」^{*30}。

ここで、キリーロフは視点を一転してアメリカ大陸からスペイン人やポルトガル人たちが奪い取った富と比較する。「もし思いもかけない事態が発生することもなく、またこれまで以上のロシア軍を動員することがなければ、ここから、良き原則と十分な

*27 Ibid., p.27. バルフは当時商業と人口の多さによって富み栄えていた重要な都市であった。そこでは、バルフ・ハーンが支配し、軍隊は3万を数えていたが、それは自衛のためのみであり、隣国を攻めることを目的とはしていなかった (Ibid., p.16)。他方、ヴォドクシャンには専横的なハーンは存在していなかった。すでにブハラのハーンから離れた時以来、共和国的な行政を施行していた。すなわち、民衆のなかから選ばれた長老たち約40名が統治していた (Ibid., p.15)。この、ヴォドクシャン地方の豊かさについては、ピョートル一世の死の直後からロシアには知られていた (佐口透『ロシアとアジア草原』、吉川弘文館、1966年、98頁)。なお、筆者はヴォドクシャンをバドクシャンとはせず、ロシア語史料に記されている通り、カタカナに表記にした。

*28 Ibid., pp.11, 13, 14, and 16.

*29 Ibid., p.15.

*30 Ibid., pp.42-43. また、佐口透、前掲書、43頁も参照。

配慮をもって、スペイン人やポルトガル人がアメリカから受け取ったように、上で述べたよその軍隊をもって富を得ることができるであろう」^{*31}、と。

キリーロフは同様に、カザフスタンの様々な地域、すなわちトルケスタン、タシケント、サイラム、カラカルパキア、およびシル・ダリア川に沿ってアラル海に注ぐ他の地域に金が存在することを指摘する。これらの地域においてさらに、銀、鉛、他の鉱物を発見する可能性があることについても述べられている^{*32}。また、彼はロシアの騎兵隊にとりカザーフ馬が利用価値のあることを見出し、中央アジア諸地域における農業や軽工業の生産の充実に注意を払った^{*33}。

3-2. 進出の政治的意味

キリーロフはこうした地方の併合に向けて、いま一つ少なからず重要な論点について考察している。すなわち、新たに獲得する領土はこの地方におけるロシアの軍事＝政治的な意味での勢力強化に繋がり、そのことが東方の強大な国家であるジュンガルやペルシアとロシアが争う可能性が大きくなり、しかもそのことがロシアにとって有利に働くことを意味していた。「草案」のなかで、彼は、ジュンガルを攻撃的な封建国家と規定している。その国家がカザーフの広大な地方同様、「ヒヴァの支配にある」一連の領土を占領し、いまや金や他の宝石が大量に採取される豊かなヴォドクシャンの地に突き進んでいることを指摘しながら、キリーロフは、ジュンガルの強大化はロシアの利益にならないとまで断言するに至るのである。ましてや、ジュンガルは「シベリア諸都市や近くの領土と接しており、それを自分の領土であると称しながら、ロシアが領有している多くの土地を狙っている」^{*34}とロシアにとっての危険性を指摘した。それゆえ、「ロシアは、[ジュンガルが]何にもまして強大にならないように、またいま以上の敵にしないようにすべきである」、とキリーロフは警告を発したのである^{*35}。

さらに、ロシアにとって南からペルシアの潜在的な危険性についても、キリーロフは次のように指摘している。ペルシア人は「トルコとの戦争を終え、その方向が変わり、これらの土地を領有するに至ったとき、そのとき、その国と隣人であることは一層危険となるであろう」^{*36}。だから、ロシアはカザフスタン、中央アジアの地でその

*31 Ibid., p.43.

*32 Ibid., pp.35, 43, and 44.

*33 Ibid., pp.15, 41, and 44.

*34 Ibid., pp.7, 8, 38, and 39. この史料の編者ドブロスミスロフは、この点に関して、真の情報が元老院や外務参議会にもたらされたとしている (Ibid., p.38)。

*35 Ibid., p.39.

*36 Ibid., p.47.

勢力を強化しなければならず、よってオリ川河口に新都市を建設すべきであると主張した。この建設によって、帝国南東の境界を防衛し、カザーフ人や他の遊牧民がロシアの境界内に襲撃することを防ぎ、彼らカザーフ人や他の遊牧民が睦まじく和合するのを妨げることができる^{*37}、と論を展開するのである。

4. 「バシキール問題」

4.1. 民族間関係—対バシキール政策

しかし、「草案」の多くの部分はバシキール人におけるツァリーズムの果たすべき課題に充てられていた。この点にこそ「草案」起草の核心があった。ロシア政府は、絶え間なく発生するバシキール人の叛乱および当該地方の諸民族がそれを支持していることに多いなる不安を抱いていた。叛乱勃発の理由はそれぞれ異なるが、17世紀後半からこの「草案」提出の時点までだけで、叛乱は1662-64年、81-83年、1705-11年と発生している。しかし、その後も1735-40年、55年、そしてプガチョーフ叛乱時の1773-75年、と後を絶たなかったのである。この不安は、特に、バシキール人における産業開発の開始とともに増大した。キリーロフは、新しい都市の主要な役割の一つを次の点にみたのである。すなわち、「以前から自らの支配下にあったバシキール人とヴォルガ・カルムイク人たちが陰謀を図ったり、合体すること（バシキール人とカルムイク人とがそうすることにわれわれは用心しなければならない）を抑えることは、大軍隊の動員やその損失を被ることなく可能である」^{*38}。ましてや、「要塞を造営することをハーン[アブルハイル]が望んでいる（ヤイーク川に流れ込む）オリ川河口の地点は、バシキール人とキルギス・カイサク[カザーフ]のオルダの真ん中に位置し、ヴォルガ・カルムイク人とバシキール人が和合しないように遠く分け隔てておく」のに最適の場所である^{*39}。

キリーロフは、帰順を願い出てきたアブルハイルを必ずしも信じてはいなかったであろう。カザーフ人はときにはバシキール人と共に行動したので、「草案」の筆者は、ロシア政府がこの地方に諸民族が共同で行動することを妨げること、さらにはツァリーズムの政策を推進する上で拠点となる都市を建設し、民族同士をけしかけ、つねに連帯して共同で行動しないように図ることを訴えていた。

*37 Ibid., pp.19, 22, 23, 37, and 38.

*38 Ibid., pp.18-19.

*39 Ibid., p.19.

「キルギス人[カザーフ人]がバシキール人とともにロシアの支配下に入ると、彼らはしばしばバシキール人とともに団結しながらも、[ロシアの]共通の敵とはならないという相反することが起こり得るし、そのことに対する証拠もある。... 彼ら[カザーフ人とバシキール人]の間にはロシアの都市はなく、ロシア軍さえも存在しない。さらにはキルギス・カイサクのハーン[アブルハイル]は自ら進んで[ロシアの]臣下になってはいないのである。それゆえ... それらのうちのいずれか一つの民族が蜂起するならば、ロシアの軍隊を派遣することなく、もう一方の民族を利用することにより鎮圧することは容易である。[都市建設により]襲撃に対して開かれたステップが広がり都市が無い現在よりは[都市が建設されると]恒常的に安全が保たれることになろう」^{*40}。

キリーロフは、バシキール人に叛乱を起こさせないために上記の方法とは別の様々な方法を模索していた。その方法として彼が考えたのは、「以前に暴動や叛乱を起こしたバシキール人のなかから、兵士や労役夫」として彼らを利用し新たな都市の建設とその防備、予想される中央アジアやジュンガリアへの遠征、交易隊商の防衛、などに勤務させることであった^{*41}。

さらに彼はバシキール人上層との連帯ないし彼らの引き込みも視野に入れていた。すなわち、彼らに勤務人ではあるがヤサークを納めなくてもよいタルハン^{*42}としての権利や特権を認め、それを確認する代わりに、彼らの妥協を引き出すことであった。キリーロフはこの点に関して、次のような興味深い意見を述べている。

「かくして、バシキール人の中には、昔から、つまり彼らがロシアに臣従した時から、特権タルハン(zhalovannye tarkhany)たる功労のあった人々が存在している。彼らはまったくヤサークを納めていない。... 一方、彼らの昔からの習慣に従って、その特権[の内容]はタルハンが自らの仲間の間にあつてはどこでも自由であるという点にある。すなわち、養蜂用の森とビーバー猟用の川を除いて、土地を耕し、干し草を刈り、役畜や馬を放牧し、水で魚をとることができる。また、彼がたとえ以前にそのような収益地を所有していたとしても、誰も彼に対しその所有権について争うことはない。何となれば、そうしたタルハンあるいは勤務バシキール人はツァーリのイヴァン・ヴァシーリエヴィチ[イヴァン4世]の治世下で、カザン占領にさいして多大の忠勤を示し、またロシア軍とともにリフリャンディア遠征に加わり、ツ

*40 Ibid., pp.47-48.

*41 Ibid., pp.26-27.

*42 V.V. Vel'iaminov-Zernov, "Istochniki dlia izucheniia tarkhanstva, zhalovannogo bashkiram russkimi gosudariami," *Zapiski imperatorskoi Akademii nauk*, tom 4, kn.2 (St.Petersburg, 1864), p.47.

アーリ・アレクセイ・ミハイロヴィチの時代にはポーランドに、後にはその他の遠征に参加したからである。しかし、現在いかなる軍務にも服していない。それについて、私は彼ら勇士 (batyr') たちと次の事を話し合うことになった。すなわち、彼らは何に対して責任を負うのか。また、その[現在の]不幸は、何処でも彼らが[ロシア軍の]軍務に就くことを求められず、またなぜそのままにして放置されるのか知らされていない点にある、と。そのような体験に基づき、彼ら良き勇士たちに厚情を与えると、彼らはいまやすべてのタルハンに関する名簿を提出することができよう。...いまもし各人に対する彼ら古来からのタルハンとしての習慣や特権が確認され、彼らに保証を与えて安心させるならば、タルハンたちは喜ぶであろう。それだけでなく、そうした習慣や特権が奪われることは[彼らにとっては]あってはならないからである」^{*43}。

さらに、キリーロフはロシアにとってタルハンを利用する際の払うべき注意についても言及する。バシキール人共同体の上層部—すなわちまず第一に勇士 (batyr') であるが—を利用することによって、ロシア政府はその地方における社会的支柱を得、それを拡大し得る。しかし、そのなかで和解させ難い者があればそれを「勤務人」として戦争に送ることができる。なぜなら「たとえ彼らがいなくなっても良いし、また家には必要ないからである」^{*44}、というのである。

キリーロフの考えによると、すべて以上の方策はバシキーリアにおけるツァリーズムの強化に役立つはずであり、またロシア政府が長年苦しんできた叛乱の勃発を未然に防ぐはずであった。このような方法を通して、ロシア政府はバシキーリアにある自然の富と人的資源を管理・運用することになったのである。

4-2. 資源

キリーロフは、自然の富に関して、それぞれの鉱物資源を具体的に挙げて次のように述べている。「バシキール人の領有地には、多くの豊かな銅鉱や他の鉱石、そして良質の雲母があるが、それらは入手可能で、ロシアやペルシアに供給できるものなのである」^{*45}、と。

特に、ロシアの塩生産の中心となるイレツク産の塩については次のように注目している。「素晴らしいイレツクの塩は、新しい都市から遠くないところにある。その塩にすべてのバシキール人たちは満足している。今後、彼らからそれを奪い取ることは必要

*43 *Materialy*, pp.20-21.

*44 *Ibid.*, p.21.

*45 *Ibid.*, p.44.

ない。ただ、需要がある分だけそこからロシアにもたらしことが可能である」^{*46}。従来、バシキール人は塩を「ただ」で、自らが必要とする分だけ採取していた。しかし、この「草案」が提出された後（国内関税が導入されたまさに同じ年の1754年）、ヤサーク税の廃止を伴う塩の国家専売制の導入によって状況は大きく変化した。バシキール人はそのことに対し、蜂起（1755年の蜂起）することによって抗議を示したのである^{*47}。

また、キリーロフは農業と安価で良質なバシキール馬の獲得を含め、ロシアにとって利益となる様々な資源について述べている。

「[北緯]52度に位置する気候の平凡な場所には、最も清い水があり、そこでは健康的なもの、耕作によって実りをもたらす土地、黒土、森林、草地、および魚や野性の動物が十分にある。バシキール人から農業用の家畜が駆り集められる。ウファーのものほどは高値でない穀物や他の食品を、バシキール人は運んでくる。なぜなら、それらは彼らの近くにあるからである。また丁度そこにあるイレツク産の地中の塩[岩塩]は最良の塩である。バシキール人はそれに満足しているのである」^{*48}。

4.3. 新都市建設

以上のことを踏まえ、ロシア南東地方に、植民の拠点としての新たな都市を建設することについて、キリーロフは自らの考えを次のように述べている。

「件の[これから建設されるべき]都市について、アブルハイル・ハーンとバシキール人たちは請願をした。すなわち、都市はオリ川河口に建設すること。かつ、それは単にキルギス人[カザーフ人]を居住させるため[あるいは扶養する]だけでなく、ブハラ、ヴォドクシャン、バルフおよびインドへ商品を自由に運ぶためにも甚だ必要であるとうたっている。(それについて、ピョートル大帝は大いに意を傾け、官金も人材も惜しまず、アレクサンドル・チェルカッスキー公[A.ベコヴィチ=チェルカッスキー公]をアストラハンから派遣した。しかし、

*46 Ibid. また「イレツクの地中の塩は最良で、全バシキール人はそれに満足している」(Ibid., p.23)という指摘も参照されたい。

*47 拙稿「ロシアにおける植民問題－18世紀の南ウラルを中心にして」『史観』112冊(1985)、88-89頁。なお、イレツク産の塩(岩塩)が国家専売になる過程については、次を参照されたい。R.E.F. Smith and D. Christian, *Bread and Salt: A Social Economic History of Food and Drink in Russia* (Cambridge: UK, 1984), pp.184-185 (鈴木健夫・豊川浩一・斎藤君子・田辺三千広訳『パンと塩－ロシア食生活の社会経済史』、平凡社、1999年、262-263頁)。

*48 Ibid., p.23.

彼は自らの不注意により、ヒヴァにて破滅したのである)。件の都市に相応しい地点は最も便利な場所で、北緯約 52 度に位置し、すべてにおいて豊かである。そこからアラル海まで陸の道と川を下って僅か 500 ヴェルスタ[約 500 キロ・メートル]である。アストラハンから歩いて行ける程とても近く、また安全でもある。アラル海とアム川とによってブハラとヴォドクシャンまで、さらにはインドとの国境までも船によって[行くことができる]^{*49}。

また、新しい都市の建設地点は前述のイレツクの塩産地が近く、キリーロフはロシアの商品とこの地方の特産品によるバーター取引を考えていた。「ロシアの工場で作られた羅紗やその他の小さい飾り物という安価な交換品で、全ロシアの騎兵隊のために、両オルダ[ここではカザーフ人とバシキール人を指す]から馬を得ることができる。そのキルギス・カイサク[カザーフ]とバシキール産の馬は良質で強壯である」^{*50}、と。

さらに彼は、ロシアの利益を上げるために、中央アジア商業ルートの変更さえも視野に入れていた。「国内商業に関していうと、オリ川の岸边にあって、またアラル海への波止場となる新しい都市では、それは拡大するであろう。なぜならば、ブハラ向けのロシア製商品を買付けのために、タシケント、トルケスタンそしてハンジャントから隊商がやって来るからである」^{*51}。

また、違う観点からも、キリーロフはこの地域の重要性について言及している。すなわち、この要塞都市の完成を待たずに、ブハラやヴォドクシャンへの隊商という形態をとって、測地学者を含めて偵察 (razvedka) を組織し行うことの提案をしている^{*52}。その上で、彼は都市について次のように述べている。

「われわれにとって[都市を]創設することは明らかな利益があり、目的があるのである。それにより、神の御助力を得て、次々に、ヴォドクシャンの豊かな土地さえも、またペルシアやインドまでロシアの主権のなかへ集め、そこから、富、すなわち金、ラピス・ラズーリ、ルビー、そのほかのものを得ることができるのである」^{*53}。

彼は都市の強化と移住について具体的に提案した。新しい都市は要塞と村(sloboda)

*49 Ibid., pp.39-40.

*50 Ibid., p.44.

*51 Ibid., pp.44-45.

*52 Ibid., pp.26-27.

*53 Ibid., pp.18-19. 佐口透氏が、翡翠を珍重した中国の歴代の皇帝に比して、ロシア、西ヨーロッパ、西アジアではルビー(紅玉)が貴重なものとされたとし、それを文化圏の差異によるものみたのは興味深い指摘である(佐口透、前掲書、58頁)。

から形成される。それは次のように建てられるべきであるという。

「現在の辺境防衛線を手本にして、小さな壕および小さな砲台を備えた土塁で囲まれるべきである。それは、そこで暮らすためにやって来るすべての人々が、[外敵による]不意の襲撃から上記のような安全な場所で生活することを可能にするためにである。というのも、本格的な要塞を造営する大規模な労働は必要なく、そこに恒常的な敵も、またその彼らには大砲もないからである」^{*54}。

4-4. 新都市への移住者対策

新都市への移住者に対し、様々な方策が考えられた。「上記の新しい都市の住民が増加するように、もし女帝陛下がすべての人々、およびあらゆるロシア人に対し（ただし逃亡農民は除く）、またブハラ人、ヒヴァ人、タシケント人、インド人および当地にやって来て支障なく住みつく他の人々に対し、特権と自由を与えるのであれば、さらにまた数年にわたりあらゆる商品に税金をかけなければ、...多くの人々がブハラやヒヴァ、タシケント、トルケスタンおよび他の遠国の地から移り住むことができるであろう」^{*55}とキリーロフは言う。そのさい、「キルギス・カイサク人[カザーフ人]、カラ・カルパク人、バシキール人および他の諸民族が確実にこの新しい都市にやって来ることを促すように行動すべきである。すなわち、[都市の周囲に]居住のために特別な村(slobody)[の設立]を望む民族を見極めるべきである。それは、彼らがどのように望んでいるのか、彼らの道徳的な状況を監督しながら、行うのである。その村では、[彼らは]国家奉仕の労役を遂行し、彼らが祈祷を行うことができるよう素晴らしい技術による石造りのイスラム教寺院を建設すべきである」^{*56}、とキリーロフは述べる。キリスト教の法を習得させながら、子供のための学校も建てるという^{*57}。さらに、カザーフ人、バシキール人、カラカルパク人、その他の非ロシア人を防衛や遠征のための軍事力として利用することも考慮されていた^{*58}。しかし、注目すべきは、すでに述べたように、非ロシア人の側からも都市設置について提案があったことである。

「ハーン[アブルハイル]自身はヤイク川に流れ込むオリ川河口の彼の支配地域近郊に[新しくこの地に建設される]ロシアの都市が建設されることを望んでいる。そこに、彼はしばしば

*54 Ibid., p.19.

*55 Ibid., p.22.

*56 Ibid., p.24.

*57 Ibid., pp.24-25.

*58 Ibid., pp.27-28, 36, and 42.

居住し、自らの職務を遂行することを約束している」^{*59}。

「このことから、キルギス・カイサク[カザーフ]とカラカルパクのハーンはロシア国家に臣従し、また新しい都市を建て、移住するであろうし、ロシアの軍隊を導入することにもなる。そのことは、コンタイシャを動揺させ、そのためハーンに名だたる諸都市を明け渡たさせることにもなる」^{*60}。

ここに至り、キリーロフは、以後、帝政ロシアが民族政策を展開する上で基本的で伝統となる「分割して統治せよ」の原則を前面に押し出すことになった。これは、すでに述べたように、民族間関係を不和のままにしておくということを理論化したものであった。

「何となればカルムイク人たちははるか以前から女帝陛下に対して臣従している。バシキール人、そして今や第三の民族であるキルギス・カイサク[カザーフ人]がやって来た。しかし、お互いに甚だ軋轢がある。そして今後はいつも彼らをそうした状態にしておくことが必要である。もし、カルムイク人たちが反抗するようなことがあれば、彼らが自分たちのハーンに対して蜂起した昨年のように、彼らに対してキルギス人[カザーフ人]を利用することができる。また、その職務を遂行しながら、アブルハイル・ハーンはその軍勢を、カルムイク人支配者の筆頭で、ヤイク川とエンベ川に沿って遊牧しているドルジ・ナザーロフのウルスに向けて派遣した。そこで、ハーンは、カルムイク人が反抗の手段を放棄し、また今後キルギス・カイサク人[カザーフ人]たちに対して恨みを抱くほどに、彼らを零落させた。また反対に、もしキルギス・カイサク人[カザーフ人]たちが何か事を起こすならば、彼らに対してカルムイク人とバシキール人を派遣するべきである。かくして、ロシアの軍隊を動員せずに、お互いを鎮め、また恭順させておくべきなのである」^{*61}。

5. おわりに

以上紹介した「草案」の論拠を得るために、I.K.キリーロフは、沿ヴォルガ、ウラル、シベリアに関するロシアの政策の歴史、過去の諸事件および世界史上の出来事に

*59 Ibid., p.36.

*60 Ibid., pp.27-28.

*61 Ibid., pp.37-38.

例を求めつつ、さらには中国や日本についても言及しながら^{*62} 筆を進めた。

しかし何よりも、ピョートル時代に実務的な官僚として登り詰めたキリーロフの提案は、彼自身によると、富の獲得や東方との交易を旨としたピョートル一世の考えや政策の本質を体現するものであった。ピョートルはその実現に向けて着手し、1717年には、A.ベコヴィチ＝チェルカッスキー公を全権大使として「ヒヴァ、ブハラ、バルフ、そして正にインドにまで」派遣したが、「本当のところは、それらの地について、その軍事力について、交易について、そして黄金について調べることであった」^{*63}。しかし、すでに述べたように、公はこの遠征の途上、その部隊と共にヒヴァで殲滅されるのである。さらに、ピョートル一世その人の早すぎる死も、彼の政策の実現を妨げることになった。

しかし、「草案」のなかでキリーロフは、ピョートルの意向を実現しようと努力している。実際、中央アジアへの足掛かりとして、カザフスタンや中央アジアなどと接するウラル地域にロシアの拠点を築くために模索しているのはそのあらわれであるといえよう。とはいえ、この地域はいわば民族混住の最前線であった。それゆえ、カザフスタンや中央アジアなどとの交易や外交政策、およびロシア南東地域の資源開発や経済開発をロシア政府が支障なく行うためには、同地域の秩序を維持することが必要となった。オリ川河口に要塞都市（将来のオレンブルク）を建設するという考えは、こうした状況のなかで生まれた。この都市が、同地域の民族間の関係を調整しながら、カザフや中央アジア諸地域とロシアとの窓となり得ると考えたのである。そのためにも、反抗を繰り返すバシキール人への対応が急がれた。

キリーロフの提出した「草案」に対して、アンナ女帝は1734年5月1日付けの指令で、その提案を認可したのである^{*64}。彼は、同年オレンブルク遠征隊の隊長に任命された。しかし、彼がオレンブルク遠征隊の隊長として新都市建設に向けて現地で活動した期間は僅かであった。就任した1年後、彼は死去し、また1735年に建設された要塞都市（現在のオリスク）も、1743年にはその立地条件の悪さから新たな地点（現在のオレンブルク市）に移転された。その後のオレンブルク市の発展には目を見張るものがある。まさにキリーロフが考えたように、この都市が南東地域で展開するロシア政府の民族政策・植民政策の一大拠点となったのである。

*62 Ibid., pp.45-46. なお、日本に対する関心はすでにこの「草案」にもみられるが (Ibid., pp.2, 5, and 45)、後のロシアの政策にも引き継がれていくものと思われる。

*63 Ibid., p.16.

*64 Ibid., pp.49-50.